

## 「2023年度ベトナム国家大学ハノイ校スプリングスクール派遣参加報告書」

京都大学理学部3年 佐藤 優光

車線境界線と澄んだ空気、それは私がノイバイ空港で手放した全てである。巷に聞くベトナム“名物”の交通は、私の想像を遙かに超えてカオスだった。そしてホテルに向かうタクシーの道中、日本では考えられないようなアクロバティック走行と、マフラーから噴き出す黒い煙にショックを受けた。待ち受ける2週間の不安と疑惧に挟まれながら、私は Grab ドライバーに身を任せていた。

それが杞憂だったことは、翌日すぐに分かった。例の如く Grab に乗って USSH(スプリングスクールで訪問した1つ目の大学だ)に着くと、事前準備の ZOOM で見た顔の幾何かが校門の前で待っているのが見えた。彼女ら(USSHの学生の9割は女性だった)は私たちを温かく出迎えてくれ、体が冷えないようにと生姜キャンディーまで渡してくれた。なんと放課後には私たちのために、ハノイの観光地を文字取り“隈無く”案内してくれた。無償のホスピタリティに私は深く心を打たれ、ベトナムに好意を抱かずにはいられなかった。

午前中から昼八時までは大学(前半週は USSH、後半週は ULIS)で授業を受け、その後は自由行動というのが基本的なタイムスケジュールであった。英語でベトナムの経済・観光業を学んだり、日本語の文法授業を参観したり、発音に苦闘しながらベトナム語を学習したり……様々な形態の授業を受けることで自分の知識量が単純に増加しただけでなく、その中に螺鈿のように鑲められた深層的な意識の違いを感じとることができた。

深層的な意識? 然ばかり抽象的な用語であるから、ここで私の学びを1つ紹介して先の文意を鮮明にしたい。盟主として集団のコンセンサスを得る際に、賛成多数を取るか反対少数を取るか? 日本では国会採決に代表されるように、賛成多数を取る傾向がある。一方ベトナムでは、反対少数を取るのがメインストリームであるらしい。このような違いについて、仲間と bún chả を食べながら議論をしたのは良い思い出である。

Đường Lâm 村と Tràng An での実地研修も、大変有意義な体験になった。都市化に伴う斑消えのベトナム情緒は、そこに確かに残されていた。伝統的な食や俗習、美しい景観など新たな発見の連続であり、これぞ海外実習の醍醐味であったと今になって思う。そして何よりも、ベトナム人の儒教的な思いやりの心を肌と感じた。彼らの先祖に対するリスペクト、年配者に対する配慮……それらは、自分の今までの行動を省みるキッカケになった。

プログラム最終日、ノイバイ空港でフライトを待つ私の携帯電話には、50件を超える LINE の通知が来ていた。その殆どはベトナムの学生からの、別れを惜しむメッセージであった。2週間は私たちにとって、あまりにも短すぎた。私たちが交わすべき言葉は、まだ数多く残っていた。それぞれに感謝を込めて返事を書きながら、私は必ず再度ベトナムに足を運ぼうと決意を固めた。

東シナ海の夜間飛行を終えて、私はある種の寂しさを覚えた。ここには霞んだ空気も、鳴り止まぬクラクションも、歩道を塞ぐバイクも無いではないか! なんだか身体の一部をハノイに忘れてきたような、不思議な気持ちになった。3600km という距離以上に、ハノイが遠く感じる。もう 10,000 ドン(約 60 円)でソフトクリームが食べられないことも、個人的にはショックだった。

スプリングスクールに参加したことで、私の国際理解への意欲は高まったと感じている。他国の長所を見つけることは、同時に我が国の短所を知ることであり、逆もまた然りであった。実際に海外に出向かなければ得られない学びがあり、それは市民生活や世界平和に対する私の考えに影響を与えた。今後も似たような海外派遣の機会があれば率先して参加したいと思える、そんな有意義な時間を過ごすことができた。お世話になった USSH と ULIS の方々、そして同行した9名の京大生に改めて感謝を申し上げる。Xin cảm ơn!

私の夢は、日本の発展と世界の安寧を支える官僚になることである。今回のプログラムを通じて知った国際連携の重要性と難しさ。それは自分の夢を実現するための良いモチベーションになった。大学を卒業して官僚になることができたなら、進んで海外大学院に留学して自己のスキルアップに努めようと思う。